戦（いくさ）と向かい合う　【その１】
～兵士の遺書を読み解くことで命を見つめ、伝える言葉の力を実感しあう、教材の開発～

松原　洋子

70年前、極限状態の「戦争」のさ中にあって、人はどのように自分や大切な人の命を見つめ、どのように思いを伝えたのか。そこにはどのような「言葉の力」があるかを意識して読み深めるために、昭和20年６月に特攻戦死された「枝　幹二氏の遺書」を平和教材として教材開発した。彼の遺書が本物とは違う形で流布した経緯を推理するとともに、本物が奉納されている場に赴き確認したうえで、正しい文章を示すことができた。またさらに、まだ公になっていない、遺書に続く文章を明らかにすることで、枝氏の人間関係や人となりを浮き彫りにし、教材としての価値を高めることができた。

[キーワード]　戦争　言葉の力　命　生　死　教材開発

１　はじめに
～戦争をテーマとする内容をどのようにとらえ、どのように教材とするか～

何十年も前のことである。私がまだ学生のとき、ふとラジオをつけると、大学入試を念頭に入れた国語科の読解解説が流れていた。講師の方はテキストを元に解説をされており、私はそのテキストを持っていなかったので漠然とお聞きしているにすぎなかったのだが、しばらくして私はびっくりした。教材文が、太平洋戦争で特攻戦死をされた方の遺書だったからである。こういう文章が教材になるのかという驚きが大きかった。しかし、さらに驚愕したのは、その先生の発問「手紙において、ふつう時候の挨拶は初めに書くものなのに、なぜこの手紙では最後にでてくるのか。」であった。発問といえば「ここで登場人物はどう考えたか。どう思ったか。」が定番と思っていた私はびっくりして、思わずラジオに聞き入ってしまった。遺書を書かれた方にとって自分の死は、覚悟はあったもののやはり突然訪れたことであろう。たいてい、遺書はあわただしく書かれるものである。だからこの方は切迫した状況のもとで、まずは一番言いたいことを書かれたのである。それは家族への感謝であり、自分の分も幸せに生きてほしいという切なる願いである。自分自身がまだ生きたいという気持ちで溢れていたであろうに、その気持ちを封印し、ただひたすらに自分のまわりの人の幸せを祈る。そうして言いたいことを書き終えた彼は、すこし冷静さを取り戻す。ここで初めて手紙の書き方を思い出し、（もう手紙の最後のほうではあったが）時候の挨拶を書いた。そしてそのあと、最後のお別れの言葉を残して、遺書は締めくくられたのである。

ラジオの講師の先生はなんとすばらしい切り口で、学生に深く考えさせていらっしゃるのだろう。時候の挨拶が置かれた場所について問うだけで、その奥に大きな読みの広がりが期待できる。この問いに答えようとした人たちは、若き特攻隊員の切なる気持ちを追体験することができたであろう。私は、この先生が遺書を教材化したということと、深く読みこんだからこそ生み出されたこの発問によって、学生をその気にさせて深く広く考えさせることができたという意味で、この先生の手腕に深く感動した。

その後、長い月日が流れた。私は国語科の教員となり、さまざまな教材を扱って、中学生とともに学んできた。私なりにたくさんの挑戦をさせていただいたが、戦争をテーマにしたものにだけはどうしても臆してしまっていた。自分が体験していないということ、生き証人がたくさんいらっしゃるし、ともすると政治的に扱われる微妙な内容もはらんでいるだけに、うかつには扱えないという気持ちから、二の足をふんでしまっていたのだ。

そんな私が今回２年間にわたって、あるプロジェクト研究に関わらせていただくことになった。それ

は、戦争をテーマとして命を見つめ、言葉の力をつけるという研究である。

戦争といっても幅広いテーマが存在する。どこを切り口にしたらよいものか。自分はどの方向に向かうべきか。何を教材とし、どんな方法で中学生とともに考え、言葉の力を学んでいけばよいのか。途方にくれたものの、幸いに世の中は戦後69年～70年という節目を迎えており、さまざまなメディアが戦争をテーマにしてこの70年を振り返る作業を始めていた。また、少ないとはいえ、生き証人の方々もまだご健在である。まずは手あたり次第にまわりにある本を読みふけり、できる限りの博物館へ行き、お話を伺うことから始めたが、その中で、ふと思い起こされたのが、あのラジオ放送であった。

あのとき教材化された遺書を探すべく、たくさんの遺書にふれさせていただいたが、結局は見つからなかった。しかし新たな発見があった。遺書は、その方の最後の生きかたを示すものである。その方が今までをどのように生きてこられて、これから迎える自分の死をどのように見つめていらっしゃるのかが、ストレートに伝わってくる。当時の軍部による書き方指導があったとも思われ、定型のようなものがあるようにも思えるが、その当たり前の言葉の中にもにじむ個性がある。訴える力がある。限られた時間の中で選ばれた言葉には、一見何気ない言葉であっても、そこに見え隠れする命の言葉がある。このことが分かって、私はひたすらに圧倒された。

学徒動員の学生による知的な遺書、農民兵士の素朴な遺書、女性の視点からの従軍看護婦の遺書。遺書とは限らない。戦地からの軍事郵便、私的な日記、等等、戦時中に誰かを思い書かれた手紙・日記・遺書には、時代を越えて人々に訴えかける言葉の力があると認識したのである。これらのうちどれかを教材化できないかと考えるうちに気になる作品にであった。それが、枝　幹二氏の遺書である。

純粋な気持ちで書かれた遺書が、70年後の今日、様々に政治的に扱われている現実があることも十分に認識はしているが、今回、私は何ら思想教育・偏向教育を目的としてはいない。今回の教材開発については、これからもこの点を強調しながら進める必要があると考えつつ、教材開発を進めていった。

2　流布している　「枝　幹二氏の遺書」の問題点

「枝　幹二氏の遺書」はかなり有名で、たくさんの本に掲載されているし、インターネットにも多く見られる。たぶん最終的に知覧から出撃して沖縄海上にて特攻戦死されたことによって、知覧特攻平和会館から出された本に枝氏の遺書が掲載されていることによるだろう。これが様々に孫引きされ、広く知られたものになったのだろう。

ところが、大きく４点にわたって、ご遺族が彼の遺書を奉納した富山縣護国神社のそれとは異なるのではないかという疑問が、私の中で生まれたのである。私が気づいた違いは、以下の4点である。

※知覧　…　知覧特攻平和会館　　富山　…　富山縣護国神社　とする。

①	知覧	六月の知覧は ……	富山	六月のチランは
②	知覧	小鳥の声がたのしさう ……	富山	「小鳥の声がたのしさう
		「俺もこんどは		俺もこんどは
		小鳥になるよ」		小鳥になるよ」
③	知覧	本日十三時三十五分 ……	富山	本日一四、五五分
④	知覧	原稿用紙三枚に書いた ……	富山	黒い手帳に書いた。

①については、「知覧」か「チラン」かという表記の違いである。②に比べれば大した違いではないかもしれない。しかし、遺書を漢字で書くのと片仮名で書くのとでは、書く時間もイメージも異なる。ましてこの遺書は出撃直前のものである。だとしたら、漢字か片仮名かは枝氏の状況を推察する材料としては大きい。

②では、出撃を待つときに、その後一緒に出撃した「杉本氏」のことばが引用されている。「　」の場所がどこからどこまでか、が２つの文献は異なるのである。「小鳥の声がたのしさう」と言ったのは誰なのか？枝氏が考えたことなのか、杉本氏の台詞なのか？

③は最大の疑問である。表記の仕方のみならず、出撃する時刻が全く異なるのである。なぜだろうか？

④は出典である。原稿用紙と手帳では全く異なる。本当は何に書かれた遺書なのであろうか？

これらを解決させるには、本物を拝見するしかない。そこで私は平成27年８月7日に富山縣護国神社をお訪ねして調査させていただいた。

3　富山縣護国神社における「枝　幹二氏の遺書」の実際

富山縣護国神社では、宮司の方をはじめ皆様に大変ご尽力いただいた。遺芳館に奉納してある「備忘日記」と「黒い手帳」および「形見の万年筆」に、直に触れさせていただき、私は胸がどきどきした。インターネットや本で紹介されている箇所以外のページも拝見することができて、枝氏の思いに近づくことができた。

枝氏は富山県出身、早稲田大学から学徒出陣し、特攻隊の第一六五振武隊という団結力の強い隊の中で、隊長代理として指揮をとった。彼が最後に出撃した基地は知覧であり、昭和20年６月に沖縄近海洋上にて22歳で特攻戦死された。

「備忘日記」には１行１行にきちんと日記が書かれ、几帳面な方とお見受けした。ところが、遺書が書かれるページからは２行分を使って文字が大きく書かれていく。「昭和二〇年~~五~~（←注　ここは見せ消ち）六月三日、夜」で始まる遺書には、いよいよ作戦命令が下り、最後と思って10ページにわたって様々なことが書かれていく。６ページめからは、数行書いてはすぐに次ページに書き始め、の繰り返しとなるので、私は彼のあせりや不安定な気持ちを感じた。家族への最後の挨拶（別に云ふこともありません／唯有難く、うれしくあります）や辞世の句、通帳の処分方法等を無難にまとめ、「笑ってこれから床に入ります／オヤスミ／六月三日二十三時」の文章を持って遺書は終了する。備忘日記にはこの後は何も書かれていない。

ところが、枝氏は、いざ本当に知覧基地から沖縄方面に飛び立つという、最後の作戦命令を待っている間に、別の黒い手帳を取りだし、「あんまり緑が美しい／今日　これから／死に行くことすら／忘れてしまひさうだ」から始まる最後の文章（これはもう、「詩」と言っていいだろう。）を書き始めるのである。この詩の前のページを拝見すると、「角度60度」といった作戦のメモが書かれてあったので、まさに肌身離さず持っていた手帳なのであろう。

4　枝　幹二氏の遺書をめぐる疑問の解決

枝　幹二氏の遺書（活字ではなく、直筆）を拝見することによって、次々に疑問点が解決していった。

①　「六月の知覧は」ではなく、「六月のチランは」である。　（富山縣護国神社が正しい。）

②　“小鳥の声がたのしさう／俺もこんどは／小鳥になるよ”とあるので、「小鳥になるよ」と言ったのは杉本氏ということになる。　（富山縣護国神社が正しい。）

③　本日一四、五五分　と鉛筆で直してある。
（つまり、枝氏がはじめに書いたのは「一四、五五分」であるが、後で誰かが「一三、三五分」と書き直したことがわかる。富山縣護国神社では初めの方を採用した。知覧特攻平和会館では後者の方を採用し、かつ「十三時三十五分」と表記も変更して世に出したということになる。）

④　原稿用紙三枚ではなく、黒い手帳に書かれている。　（富山縣護国神社が正しい。）

※知覧特攻平和会館に奉納されたものは、確かに原稿用紙3枚である。つまりどなたかが黒い手帳の文章を別の原稿用紙に書き起こしたということになろう。

5　枝　幹二氏の遺書　に加わった人物　及び　新たな事実の発見

ここまではすぐに解決したのだが、ただちに次の疑問がわき起こった。それは、上記③のところで、鉛筆で書き直した人物は誰か？そして書き加えた目的や理由は何か？という疑問である。

今回の取材活動で、これが新たな発見ともなった。

実は、４ページから成る黒い手帳の詩は、３種類の筆記用具で書かれている。

１～２ページめは青鉛筆。３ページは赤鉛筆で書かれ、大きく３か所にわたって鉛筆で加筆されている。４ページは赤鉛筆のみ。そして実は黒い手帳にはその先があった。５ページ目は白紙。６～７ページめにわたって、細かい鉛筆の字で、「陸軍兵長　末永武吉」氏が「昭和二〇年六月八日」に書いた文章が続く。富山縣護国神社の栂野守雄宮司によれば、この部分は枝氏の文章ではないので世に出さな

かったとのこと。しかしこれを拝見することによって、総てが解決できた。

枝氏の遺書及び末永武吉氏が書かれた文章から推測するに、このようなことになるであろう。枝氏は備忘日記に、万年筆を使って遺書を記した。時間がないとはいえ、まだ心に余裕があるときで、書き終わったのは「昭和二十年六月三日二十三時」のことである。

その後、出撃するべく知覧基地に移動。出撃は「六月五日」である。ここで枝氏にはまさに出撃直前に沸き起こった強い想いがあり、忙しい中、黒い手帳に書き始めた。多分赤青鉛筆の青の部分を使ったのであろう。そうして２ページ目までを書ききった。そして一度筆記用具を手放す。ややあって、彼は再び３ページ目から書き始めるが、このとき手にしたのは赤青鉛筆の赤のほうだった。青いほうに持ち替える暇もなく、そのまま一気に４ページまでを書き終え、手帳を閉じる。そして多分形見の万年筆（備忘日記に遺書を書いたのは、この万年筆であろう。）とともに黒い手帳を、彼の飛行機付きで整備をしてきた末永氏に渡したのであろう。

末永氏と枝氏は昭和20年３月に出会い、それ以後、「今迄苦しいこと楽しい事を共にやって来ました」「少尉殿は大辺御精神の出来た方でありまして何時も整備員である自分をはげまして来れました」とあるように、二人には飛行機乗りと整備員という仕事を超えた絆があったのであろう。

末永氏は、枝氏が特攻戦死された後、枝氏の遺品をご遺族に送る仕事をしている。このとき末永氏は、枝氏が託された黒い手帳を開き、枝氏の御両親にあてて枝氏の最期について書き加えていったのである。ちなみに、末永氏が使った筆記用具は鉛筆である。

末永氏には、枝氏との、短いけれども濃い３か月間のあれやこれやの思いが溢れてきていた。そして、「又愉快な方で　いつもにこ〳〵されてゐて　自分に『今度征つたら一番大きなやつをやるから安心しろハハハッ』と・・・・・・涙が出て書けません」と記し、最期のもようを涙ながらに書いていく。

彼は、黒い手帳の遺書（詩）３ページにも、以下の３か所を加筆修正したのである。文房具は鉛筆なので、末永氏が行なったとみてよいだろう。末永氏が枝氏の黒い手帳の遺書に書き加えたと思われるのは次のとおり。

・一四、五五分　　→　一三、三五分　と直した。
・６・５　　→　６・６　　と直した。
・「六月五日は暴風の為中止となり　六月六日となった」と書き加えた。

つまり、枝幹二氏は昭和20年６月５日14時55分に知覧基地を離陸する作戦に沿って、最後のスタンバイをしていた。しかし暴風のため当日の作戦は中止となる。よって、改めて次の日、昭和20年６月６日13時35分に知覧基地を離陸し、沖縄洋上にて特攻戦死されたのである。

末永氏は枝氏の御両親にあてて、枝氏の最期について、正確な詳細を語ってあげたかった。そこで、枝氏が書いたものを鉛筆で直して御両親に知らせたというわけである。

それにしても、ここまで遺書を書き終え、今生の別れをした後に、作戦延期というのは、なんと酷いことだろうか。これまで私は、生きながらえてしまった特攻隊員が荒れる様子を語った文章を幾つか読んだことがあるが、枝氏はどうだったのだろうか。彼はこれ以上、何も文章を遺していない。思いがけず１日寿命が延びてしまったが、きっと彼の中では備忘日記と黒い手帳とに書いた強い想いを以て、すべてが終わっていたのであろう。だからこれ以上書き加えることはなかったのであろう。

末永氏はこうした枝氏の思いを、すべて受けとめていたと思われる。彼は、枝氏の御両親に枝氏の最期を語るとき、枝氏が加わった特攻戦の「戦果」についても書いている。全くの憶測でしかないが、ここに末永氏が書いた「戦果」の数字はまことに華々しく、物資も尽きた昭和20年６月であることを考えると、とても本当の数字とは思えない。

「口外されぬ様」とあるように、そもそも戦果という機密情報を一般人に漏らすというのは軍人として違反である。それでもこのように戦果を書かずにはおれなかった末永氏に、枝氏の御両親への配慮や枝氏との深いつながりが読み取れるだろう。

こうして末永氏は、昭和20年６月８日に、「自分は今任務完了して、枝少尉殿の遺品を送」ることで、この仕事に一区切りをつけたのである。

彼が加筆修正した鉛筆書きの部分は、書かれてから70年たって、なかなか読みづらくなっていた。し

かし、そこに末永氏が書かずにはおれなかった強い気持ちもこもっていて、私は圧倒された。小さなノートなのに、このノートに文章を記されたお二人の気持ちがひしひしと伝わってくる。活字ではなく、手書きであることの強さ。目の前の死をしっかりと受けとめたからこその、「ことばの力」の強さ。

富山縣護国神社の栂野守雄宮司をはじめ皆様には、本当にお世話になった。奉納された御遺品の数々をわざわざ遺芳館からご提供いただき、時間をかけて拝見させていただいたおかげで、枝氏と末永氏の物語が大きくイメージされてきた。それは書物やインターネットだけでは到底わからなかったことである。

ご懇切なお心遣いをいただいた富山縣護国神社の皆様に、謹んで厚く御礼申し上げる次第である。

6　「枝　幹二氏の遺書」および「枝氏のご遺族にあてて書き加えた末永氏の手紙」の、教材化の可能性

① 「枝　幹二氏の遺書」を使った実践例（まだ諸問題が解決に至らず、末永氏の手紙の存在も知らなかった時の実践である。富山縣護国神社による遺書をもとに教材化した。）

戦争について様々な視点から扱う単元学習の中に加えて実践した。

ここで私が用意した発問（学習の課題）は、次のとおりである。

発問：「備忘日記」の中で遺書は完結させたはずなのに、さらに出撃直前になって黒い手帳に別の遺書（詩といってもよい）を書く気になった枝氏の心境を探ろう。彼は何を伝えたかったのか。

指導の詳細については拙稿（注１）をご参照いただきたい。

② 枝　幹二氏の出撃を見送った後、彼の書いた黒い手帳に書き加えて枝氏のご遺族に向けて手紙を書いた末永氏の文章にも焦点を当てた指導

発問：（末永氏が書き込んだと思われる部分を明らかにし、彼の書いた文章の意味も確認したうえで）枝氏のご遺族に向けてこういう手紙を書き加えた末永氏はどのような考えを持つ人と推測されるかを、書かれた言葉をもとに話し合ってみよう。

戦争を背景とする様々な文章と同時に『平家物語』を重ねて読むという実践の中で行った。『平家物語』に登場する何組かのペア（木曽義仲＆乳母子である今井四郎兼平等）と、枝　幹二氏＆末永武吉氏のペアのつながりを、「戦時下にあって、深い絆を示したペア」としての共通点を見出して読む者が多かった。また、末永氏が本当の「戦果」を書かなかったことに注目し、「木曽殿の最後のいくさに女を具せられたりけりなンどいはれん事もしかるべからず」と言って愛する巴を戦場から去らせた木曽義仲・「貴様らのような人種と共に戦いたくない」と言ってペリリュー島の島民を強制移住させた後にアメリカ軍との大激戦を繰り広げて亡くなった日本軍守備隊、というように、相手を大切に思えばこその「言葉のうそ」であることに重ねて見ていった者もいた。

上記の実践によって書かれた学習者の作品例

【作品例１】私は、第二次世界大戦と平家物語に関することを学び、今では考えられない生と死について考えた。戦さに関する文章を読むことは、自分の生活の内容とかけ離れていることもあり、とても衝撃的なことも多かった。しかし、その分、自分の心に強く残り、印象深い、ためになる学びができた。その中でも、特に自分の中に残っている二つの文章がある。

一つは、枝幹二氏が遺書としての日記の他に、最後に付けたしたと思われる黒い手帳の中にある文章だ。それは、「あんまり緑が美しい／今日　これから／死に行くことすら／忘れてしまひさうだ／真青な空／ぽかんと浮ぶ白い雲／六月のチランは／もうセミの声がして／夏を思わせる／“小鳥の声が楽しさう／俺もこんどは／小鳥になるよ”／日のあたる草の上に／ねころんで／杉本がこんなことを／云ってゐる／笑はせるな」というもの。特攻作戦にあと少しで飛び立つ、死に行く間際に書かれたものだ。この文章はとても素直な気持ちで書いたと思われる。内容も数日前に書いていた遺書の事務的な様子と違い、自分の思った本心がそのまま記されている。また「緑」や「空」や「雲」など、

いつも目にするものを改めて見て、目に焼きつけている様子が想像される。彼は死を前にして改めて、自然の美しさを発見したのだ。さらに、「小鳥」というのは、戦わない存在である。今の自分たちと重ねるととても楽しそうだと思ったのではないか。この文章から多くのことを考えさせられた。死ぬという自分の運命と向き合う中で、枝氏が思ったことはたくさんあると思う。ことばでも残されている。生きていたい思いもあるだろう。死を前にしてもなお発見することがあって感動できる生の喜びと同時に、別れの悲しみもあるだろう。命を見つめ直すことができた枝氏を、私は尊敬する。彼は一日を必死で生きていた。このように、命の重みと第二次世界大戦の厳しさを学ぶことができた。
（以下略）

【作品例２】 …… 枝さんは、出撃命令が出た六月三日夜から、当日の出撃する直前まで手帳に最期の言葉をつづっていた。そこには、両親や姉妹たちに向けてのメッセージや、短歌などがたくさん書かれていた。それまでは、日記帳の線に沿って一行一行丁寧に書かれていたそうだが、最期に書いた遺書は、字もあまり綺麗とは言えないような字で行も気にしていないようだった。その遺書を見て、自分が本当に死ななければならない時、人間はとにかく大切な人に「想い」を伝えたい、という一心で焦る気持ちが強くなるのだな、と感じた。実際に、枝さんの遺書の始めのほうには、「あわただしい中に最後と思ってペンをとる」とあることから、本当にもう生きている時間は少ないんだと実感していたのだと思う。自分の命を本当に惜しいと思い、これからも家族たちは、元気に仲良く暮らしていくのかな、などと考えていたはずだ。

悲しくて、絶対に国のためになんか死にたくない、と誰もが心の中で思っていたと思う。枝さんもその中の一人だと思う。しかし、当時は死にたくない、と口に出したり手紙に書いたりしていたのがばれてしまったら、非国民と言われる。（略）枝さんの手帳にも、「国のため死ねるよろこびを痛切に感じています」と書かれている。（略）

しかし、枝さんはまさに死の直前、手帳に書かれた言葉が、生きていることの幸せを物語っていた。毎日のように見ている木の緑を美しいと感じていたり、青空やぽかんと浮かんでいる雲についても書いたりしている。それだけ、毎日当たり前のように見てきた景色ももう二度と見れなくなってしまうという悲しみ、そして自分はこれからわざわざ死ぬために飛行機に乗るんだ、という決意が伝わってきた。このとき、彼は今まで生きてきた中で一番、命の大切さに気付いたのではないか、と思う。

枝さんは、全ての思いを自分の手帳に託し、飛び立っていった。枝さん本人が書いた遺書の内容についてはここまでだが、枝さんに代わって遺書を枝さんの両親に送ってくれた、末永武吉さんという方がいる。末永さんは枝さんの両親に向けて、手紙を添えて遺書を送っている。その手紙の内容は、枝さんの良き人柄を感じさせる内容だった。また末永さんは、ばれてしまったら自分が重い罰を受ける羽目になるのに、それを覚悟で本当は言ってはいけないことを手紙に書いていた。普通なら、危険を冒してまでそんなことはしない。それだけ、枝さんと末永さんとの仲が良く、いかにお互いを信頼しあっていたかがわかった。　（中略）こんな大変な時代を生きていた人、生き抜いた人、誰もが苦労して、まさに死に物狂いで生きてきた。そんな方たちがいたからこそ今の私たちがあり、日本があるといっても過言ではない。どんなに今平和に暮らせていても、70年以上前の戦争を忘れてはならない。そしてこれから先、二度と戦争を起こしてはならない。それは、戦争を体験した方たちだけでなく、世界中の誰もがはっきりと言えるようにならなければならないと思う。今の私にできることは、もうはっきりしている。それは、たった今平和に生きていられることの幸せを感じ、一つひとつの命の大切さを噛みしめて生きていくことだ。

【作品例３】戦争についての学習で考えたことをどうしても伝えたい。私が「命」と「ことば」の関係性について考えるきっかけともなった、ある資料がある。それは、特攻隊となり、敵軍に向かって突進し、命を落とした方々の日記である。その中でも、『備忘日記』と『黒表紙の手帖』を書いた、枝　幹二氏の日記を例に挙げる。出撃すると決まるまでは綺麗な字で一行に一文字ずつ、丁寧にその日にあった出来事などが書いてあった日記。しかし、特攻に行くと決定した日の日記は同じ方が書いたとは到底思えない。字は読めるが、殴り書きと走り書きを混ぜたような、そんな字だったのだ。この日記を見て、私はそれまであまり想像が浮かばなかった「特攻隊」の恐ろしさがありありと浮かんだ。「隊長として部隊をずっと引っ張ってきた」という自信や、「日本はまだ勝てる」という思い、す

べてを奪い去り22歳という若さでこの世を去った若者がいたという恐ろしさ。また、その裏には「本当は死にたくない」「生きたい」という思いや「それでも日本のために行かなければならない」という虚しさがにじみ出ている。このように、たった数ページの日記や手帳から、筆者の溢れんばかりの想いが伝わってきた。「大切な一人一人の命」を思うことばには、「時代を超えて人々の心を響かせる」力がある。しかし、逆を考えてみると、言葉というものは自分が伝えたくなかったことまで相手に伝わってしまい、相手を傷つけたり悲しませたりしてしまうかもしれない。だから私は自分のことばで、はっきりと自分の思いを伝えようと思う。そして、これからの残りの命を人々の存在を大切にしながら過ごしていきたい、そう決めた。

【作品例４】 …… また、整備士の末永さんは特攻で亡くなった枝さんの両親に水増しした戦果を知らせた。これもまた、相手を思っての嘘である。末永さんは、枝さんの死は無駄ではなかったということを伝えたかったのだと思う。

【作品例５】枝氏と末永氏の絆は深い。お互いを信頼していないと、共に戦うことはできない。まるで木曽義仲と今井四郎のようだ。義仲と違ってたった３か月の関係なのに、「戦友」以上の絆が見える。末永氏の文章は悲しみと遺族への優しさであふれている。

7　教材の扱い（留意点）

今回新教材として開発した遺書には、「扱い注意」のところもある。戦時中では当然であった軍国主義的思想ゆえの発言（例「国のため死ぬるよろこびを痛切にかんじています」「唯君のため散るをよろこぶ」）は、民主主義の時代となった現代ではさまざまな解説が必要となってくる。あるいは、さまざまな船の名前も登場するが、これらがどんな目的を持った船であるかを語る必要はないだろう。このように、指導者が慎重に扱わなければならないところ、学習者に対して丁寧に当時の事情を語らなければならないところ、教材の趣旨とは異なるために省略すべきところ、等をよくみきわめて指導していく必要がある。

以前、成人式の式典において、ある方が特攻隊員の遺書を引用して祝辞を述べたことがある。素直に感動した若者もいた半面、偏向教育と罵る者もおり、結果としてその方のホームページは「炎上」した。「特攻隊員」を持ち出した段階で拒否反応を示す人も多いという現実がある。さまざまな考えをお持ちの保護者がいらっしゃることを考えると、枝　幹二氏の遺書は「あんまり緑が美しい」から始まる、後半の黒い手帳の部分のみを教材化するという方法もある。現に、さまざまに出版されている本やたくさんのインターネット情報では、この後半からのみ取り上げられている。ここだけならあまり思想的なものを感じずにすむからであろう。

ただし、枝氏が死の直前に「あんまり緑が美しい～」が書けたのは、事前に無難にまとめた遺書を書き終えていたからだと私は考える。家族との別れならば、まずはこれまでのお礼、感謝、およびこれからの家族の幸せを祈るという流れの文章を書くことになろう。そうやって、言うべきことは言い終わっていたからこそ、彼は解き放たれ、死を前にして自由な表現法で思いを綴ることができたのだ。

学習者の中には、前半の遺書と後半の詩を比較することによって、枝氏の心理状態を探った者もいる。枝氏の思いについてより正確に知るためには、前半と比べ読みさせるのもよいかと思い、今回は枝氏の遺書のすべてを公開した。

また、前述のとおり、その後手紙を書き加えた末永武吉氏の文章も、枝氏と末永氏の人間関係を知るには不可欠であった。なぜ枝氏の遺書に加筆修正が加えられたのかを解くためにも、末永氏の手紙は必要である。

今回は教材開発の観点から、枝氏の遺書およびそれにつながる末永氏の手紙をすべて公開させていただいたが、学習者の実態や保護者への配慮、学習の目的や与えられた時間数によっては、読解する部分を選んでいくことができるだろう。

国語科における教材では、戦争を「かっこいいもの」と受けとめるのではなく、また社会科的な扱いとするのではなく、戦争下という極限状態にあって、人々がどのように自分や大切な人の命を見つめ、どのように思いを伝えようとしたのか、そこにどのような「言葉の力」があるか、を実感できるようにしなければならない。枝氏や末永氏の遺した言葉を具体例として、何百年たっても変化しない人間の想

いが「言葉の力」とともにあることにも気づかせたいと考える。場合によっては保護者に対しても、こうした事前説明をしてから取り組む配慮があってもよい。

8　終わりに

平和教材というと、ストレートに戦争の残酷さ・悲劇を表現したものもあるが、最近は間接的に知らせるものが多い。それでも扱い方によっては学習者にも十分に伝わるのだが、平和ボケしている者にとっては、毎年1回は巡ってくる「戦争もの」教材に辟易し、学ぶ前から「はいはい、戦争は残酷で、やらないほうがいいんでしょ、自分たちが平和を続けられるよう努力すればいいんでしょ。」といった発言をして思考を停止してしまう者もいる。

学習者が真剣に考える教材、学習者の心に響き、届く教材でなければ、教材開発をする意味がない。その意味で、この新教材には力があると考える。それはこれを書かれた方が実在するからであり、実話であるという重みと同時に、枝氏や末永氏の表現法が何の技巧もこらさず、真の叫びで溢れているからである。

なお、これまで記してきたように、今回教材化を図ったものの出典は、２つある。１つは、「枝　幹二氏の備忘日記」で、もう１つは、同じく「枝　幹二氏の黒い手帳」である。これらはご遺族である妹様が富山縣護国神社に奉納されたもので、ただいまは富山縣護国神社の遺芳館にある。

黒い手帳の中の最後の２ページには、「末永武吉氏」が書かれた文章が載っている。

本来ならば末永武吉氏ご本人あるいはご家族の方にご了承をいただいたうえで教材化するべきであるが、私なりに手は尽くしたものの、個人情報保護の観点と戦後70年という年月に阻まれ、結果的には関係者の皆様にまでたどり着くことができなかった。

しかし、枝　幹二氏のご遺書は末永武吉氏の添え書きによって完結するものなのである。また、この文面から溢れるお二人のあつい友情は、戦後70年たっても褪せず、70年後の学習者にも十分に伝わるものであり、是非とも末永氏の文章までを含めて教材化を図りたいと考えた。

幸い、この２冊が奉納されている富山縣護国神社の栂野守雄宮司から力強く背中を押していただいたおかげで、このような教材を作らせていただき、授業実践にまで至ることができた次第である。

この場をお借りして、栂野守雄宮司をはじめとする関係者の皆様にあつく感謝を申し上げたい。

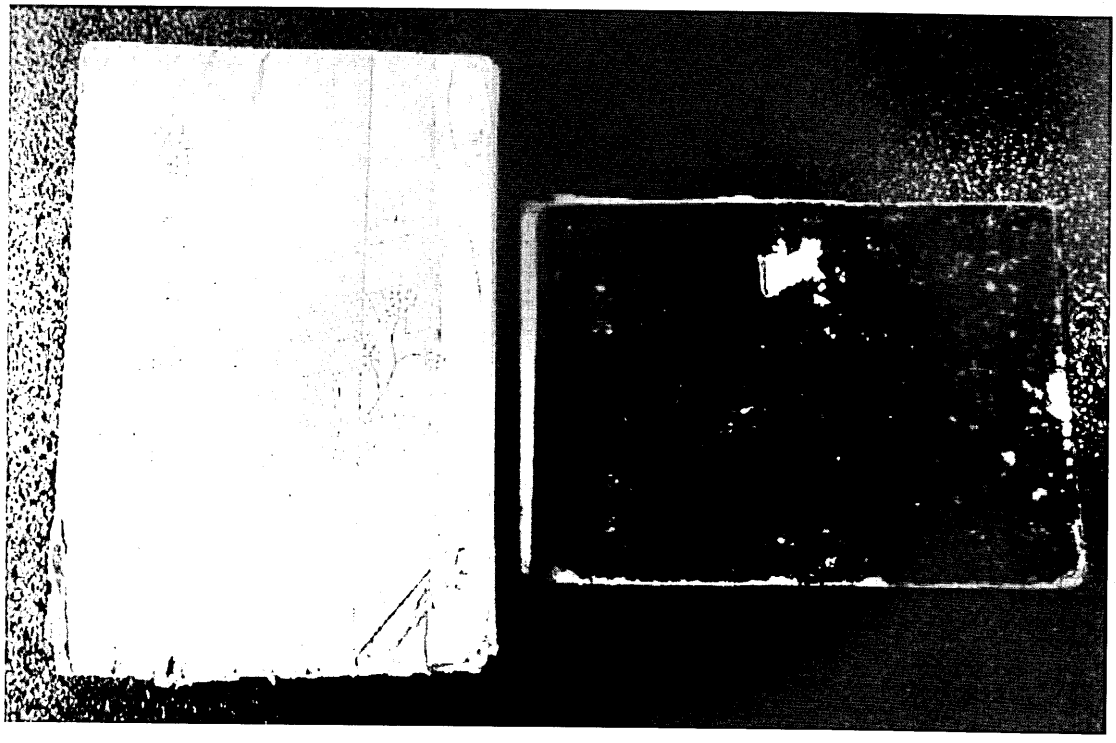
なお、末永武吉氏ご本人あるいはその関係者の皆様がいらっしゃったら、是非ご一報いただきたいと、強く願っている。

【参考文献】

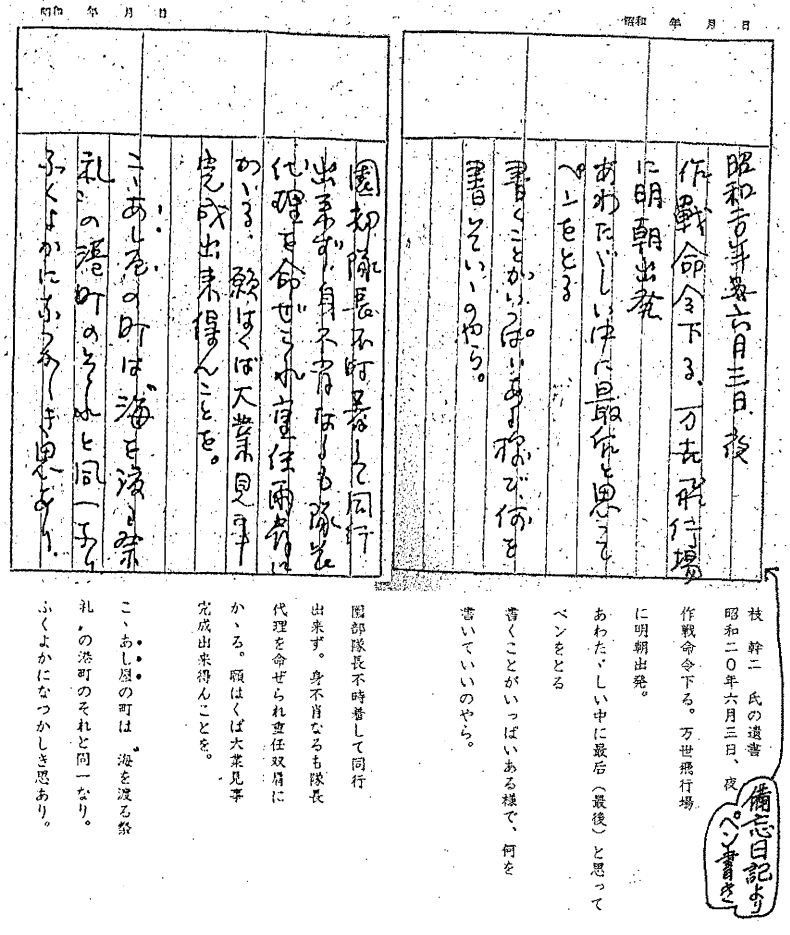
注１　「戦争と向き合うことで命を見つめ、伝える言葉の力を実感し合う学習指導
～さまざまな較べ読みを通して（中学３年）～」
（東京学芸大学附属小金井中学校　研究紀要第51号　2015年　P.209～P.224　松原洋子）

※次ページから、教材開発した資料を載せるので、ご参照いただきたい。

【教材化して配布した資料】



枝　幹二氏が初めに遺書を書いた「備忘日記」と出撃直前に書いた「黒い手帳」



昭和二十年六月三日、夜
作戦命令下る。万世飛行場
に明朝出発。
あわただしい中に最后（最後）と思って
ペンをとる
書くことがいっぱいある様で、何を
書いていいのやら。

備忘日記より

園部隊長不時着して同行
出来ず。身不肖なるも隊長
代理を命ぜられ重任双肩に
かゝる。願はくば大業見事
完成出来得んことを。

こゝあし屋の町は海を渡る祭
礼の港町のそれと同一なり。
ふくよかになつかしき思あり。

枝　幹二（えだ　かんじ）氏

- 富山県　出身
- 早稲田大学から学徒出陣。
- 第一六五振武隊長として指揮をとる。第一六五振武隊は団結力の強い隊であった。
- 出撃基地は、知覧
- 戦死の詳細　沖縄洋上にて特攻戦死
- 戦死日　昭和二十年六月六日
- 年齢　二十二歳
- 戦死後の階級　少尉→大尉

昭和　年　月　日

思ひはめぐる三千里
あれこれと昔のことがしのばれる
女々しきにあらず楽しき
過去の追憶なり。

半田のこと
名古屋のこと
東京のこと
富山のこと。

昭和　年　月　日

父上様
母上様

色々有難うございました
別に云ふこともありません
唯有難く、うれしくあります
最後の時まで決して御恩
はわすれません
月なみなことしか出て来ません

昭和　年　月　日

姉妹の皆さん
いよ〳〵本当にお別れ。
今でも例のごとくギャー〳〵
みんなとさわいでいます
哲学的な死生観も今の小生
には書物の内容でしかありません
国のため死ぬるよろこびを
痛切に感じています

昭和　年　月　日

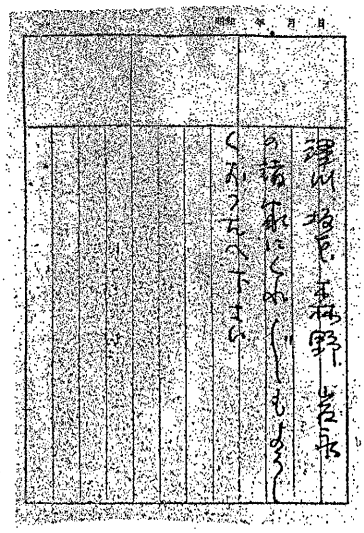
在世中おせわになった方々
を一人一人思ひ出します。
時間がありません
たゞ心から
有難うございました

昭和　年　月　日

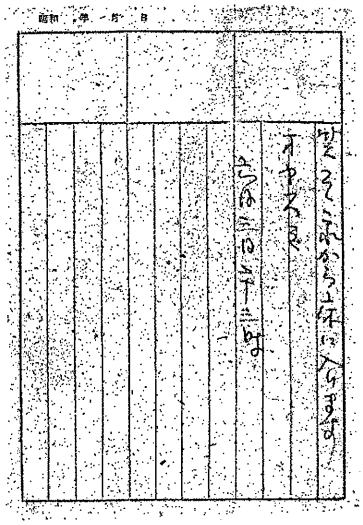
詩世
春風に咲いた櫻の
咲くまもあらず
唯君のため
散るをよろこぶ

昭和　年　月　日

同封の通帳よしなに御処分
下さい。

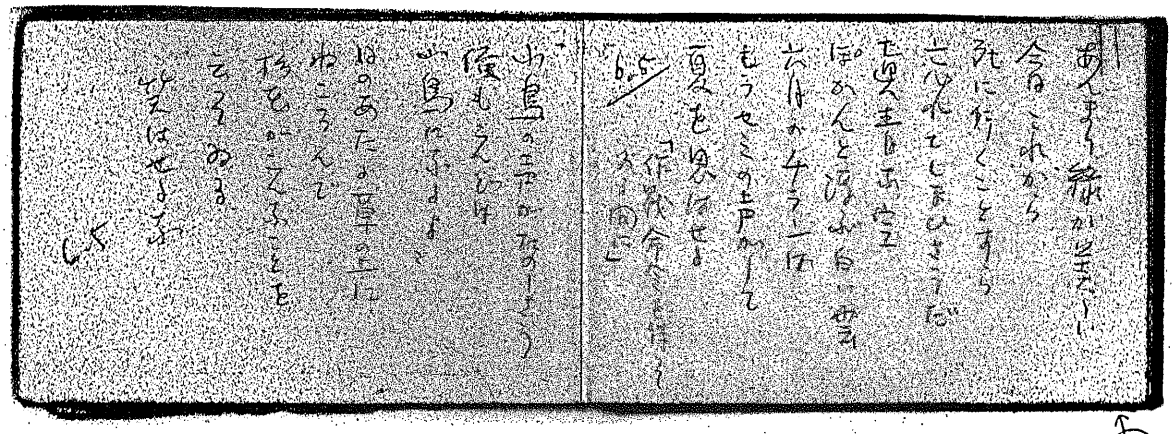


津川、坂本、森野、岩永
の諸氏にくれぐれも
くおつたへ下さい



笑ってこれから床に入ります
オヤスミ
六月三日二十三時

墓地
・知覚
・万世
・都城
・熊本
・鹿屋
・大刀洗
・台湾
・伊屋
など

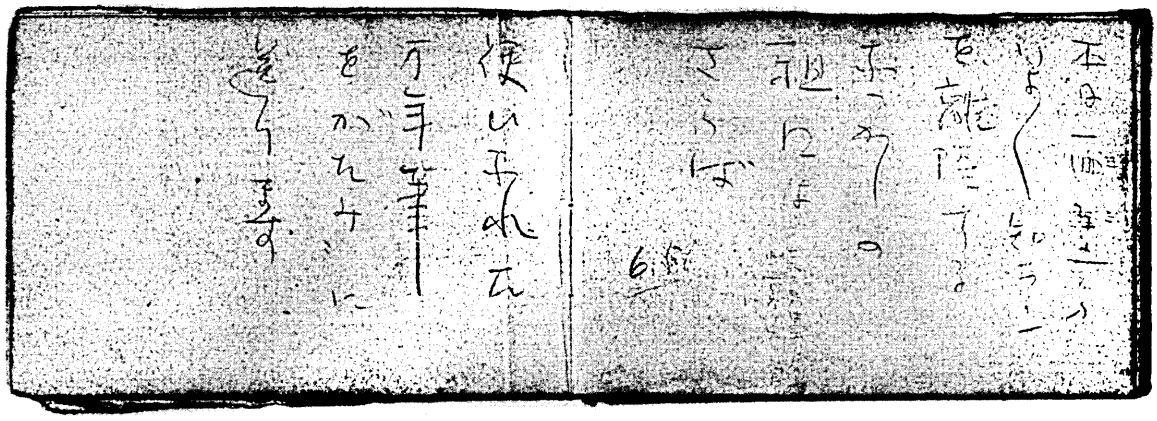


これより黒表紙の手帖

あんまり緑が美しい
今日　これから
死に行くことすら
忘れてしまひそうだ
真青な空
ぽかんと浮ぶ白い雲
六月のチランは
もうセミの声がして
夏を思はせる
「作戦命令を待って
ある間に」

小鳥の声がたのしさう
俺もこんどは
小鳥になるよ
日のあたる草の上に
ねころんで
杉本がこんなことを
云ってゐる
笑はせるな

仲間
・中川　勝氏　東京　22歳
・杉本　明氏　京都　20歳
・枝　幹二氏　富山　22歳
・渡辺　静氏　長野　22歳
・和田　照次氏　長野　21歳



ここから赤鉛筆

鉛筆で直してある。

一四 三三 五五

本日一四、五五分
いよ〳〵知ラン
を離陸する
なつかしの
祖国よ
さらば

六月六日は暴風の為十七名死亡した

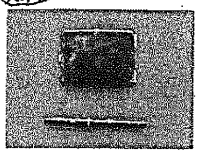
鉛筆で加筆

6.30

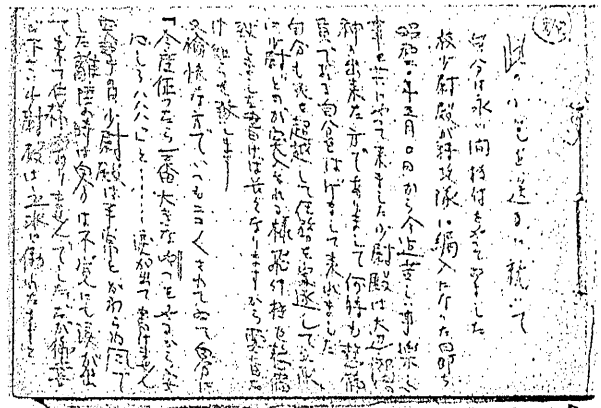
鉛筆で直してある

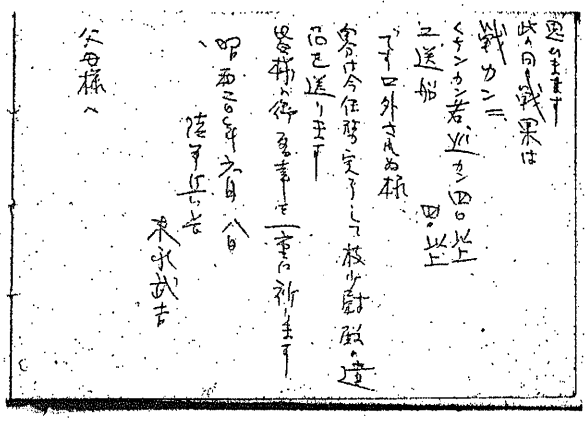
使いなれた
万年筆
を〝かたみ〟に
送ります

資料



枝幹二命が最後の言を書かれた万年筆。早稲田大学時代文学青年と言はれ、知覚の基地においても、少年飛行兵から兄のやうに慕はれ、多くの詩文を残してをられる。この万年筆は、末の妹さんが大切に保管されてゐたものを遺族へ寄贈。





鉛筆で加筆

(仮)

此の小包を送るに就いて
自分は永い間機付をやってゐました
枝少尉殿が特攻隊に編入になった日、即ち
昭和二〇年三月〇日から今迄苦しい事楽しい
事を共にやって来ました 少尉殿は大辺御精
神の出来た方でありまして何時も整備
員である自分をほめまして来（く）れました
自分も死を覚悟して任務を完遂（かんすい）して立派
に少尉どのが突入される様 飛行機を整備
致しました 書けば長くなりますから要旨だ
け知らせ致します
又愉快な方で いつもにこ〳〵 されてゐて 自分に
「今度 征（い）ったら一番大きなやつをやるから安
心しろハハハッ」と……涙が出て書けません
突撃の日 少尉殿は平常とかわらぬ風で
した 離陸の時は自分は不覚にも涙が出
て来て仕様がありませんでした だがお喜
び下さい 少尉殿は立派に働（か）れた事と
思ひます
此の日の戦果は
戦カン（戦艦） 二
くちくカン（駆逐艦） 若（もしくは）
巡カン（巡洋艦） 四〇以上
ユ送船（輸送艦） 四〇以上
です 口外されぬ様。
自分は今任務完了して 枝少尉殿の遺
品を送ります
皆様の御多幸を一重（ひとえ）に祈ります
昭和二〇年六月八日
陸軍兵長
東永武吉
父母様へ

以上は富山縣護國神社 よりご協力いただきました。